

戦国を駆け抜けた一族に学ぶ人間力

# 真田三代 逆境を生き抜く知恵と戦略

## 第一卷

---

幸隆・昌幸編

## はじめに

真田氏は、戦国大名武田氏の家臣から身をおこし、独立の大名となっているが、ランクとしては一番下である。近隣の上杉・北条・徳川といった大戦国大名とは比較にならない領国規模であり、ふつうなら、ほとんど注目されることもない。

ところが、その真田氏の人気は抜群である。上杉・北条・徳川氏らを大企業にたとえば、真田氏はベンチャー企業といった趣があり、どのようにして営業成績をあげていったのかという興味もある。

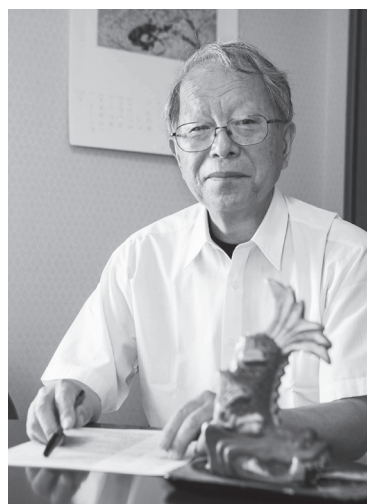
真田幸隆・昌幸二代のベンチャー企業たちあげの時期を追いかけていくと、二つのことが頭に浮かんでくる。一つは、情報戦略である。真田氏が修験者などを使って情報収集にあたっていたことは有名で、それがのちに、猿飛佐助などの「真田十勇士」といった忍者集団として描かれることになるが、確実な情報をつかんで進む方向を決めていたことは、現代を生きる我々にも大いに参考になる。

もう一つは、特に、昌幸と子の幸村による権力に立ち向かう姿勢である。チャレンジ精神といい換えてもいい。昌幸・幸村父子は、上田城に、二度も徳川軍を迎え、二度とも撃退しており、そのあたりに、真田人気があるのかもしれない。昌幸の二人の子、信幸と幸村の生き方をみていて、現代の我々が学ぶべきもう一つは判断力である。いわゆる「犬伏の別れ」が象徴的といってよい。

たしかに、長男信幸の妻が徳川家康の重臣本多忠勝の娘で、二男幸村の妻が石田三成の盟友大谷吉継の娘だったという姻戚関係にしばられたという面もあるが、親子兄弟で別れ別れになるというのは相当な決断だった。しかし、その決断によって、兄信幸が真田の家を残し、弟幸村が真田の名を残したわけで、こうした例はそんなにあるものではない。

人間、どうしても強い者になびき、長いものに巻かれがちである。真田氏は、したたかに戦国の荒波を乗りきったわけで、いま、その生き方から学ぶべきことは多いはずである。

私は、「歴史を学び、歴史に学ぶ」といういい方をするが、歴史を学ぶことで、それから自分の指針をつかんだり、先人たちの成功例だけでなく、特に失敗例からも学ぶべきだと考えている。本講座もそうした観点で受講していただければ幸いである。



## 小和田哲男

(おわだ てつお)

文学博士、歴史学者。特に日本の戦国時代に関する研究で知られる。静岡大学名誉教授。

執筆、講演活動のほかに、NHK『歴史秘話ヒストリア』やNHK Eテレ『知恵泉』などで解説を務める。戦国史と現在のビジネスマンの生き方を比較するような著書や講演も多く行っている。NHK大河ドラマの時代考証も行っており、1996年の『秀吉』、2006年の『功名が辻』、2009年の『天地人』、2011年の『江～姫たちの戦国～』、2014年の『軍師官兵衛』の時代考証を担当した。

# 目次

第一巻では、戦国乱世の世の中で、数々の逆境に耐え、力を発揮していった真田幸隆と昌幸の原動力、そしてその力をいかに蓄えていったかを学んでいきます。

## 第一章

はじめに	2
目次	4
真田三代の主な足跡	8
<b>真田家の土台・基礎づくり</b>	<b>11</b>
一． 真田のルーツとその経済的基盤	12
二． 真田の領地 場所的利点を活かす	14
三． 真田の領地経営 地場産業の推進	16
四． 武田家から学ぶ 幸隆は信玄に属す	18
五． 幸隆の武田家への貢献 信玄からの課題	20
六． 幸隆の働き あきらめないことで逆転	22
七． 幸隆の川中島での働き 情報収集力	24
八． 修験道との結びつき 情報収集の方法	26
九． 武田信玄・山本勘助から学ぶ 学ぶ姿勢	28

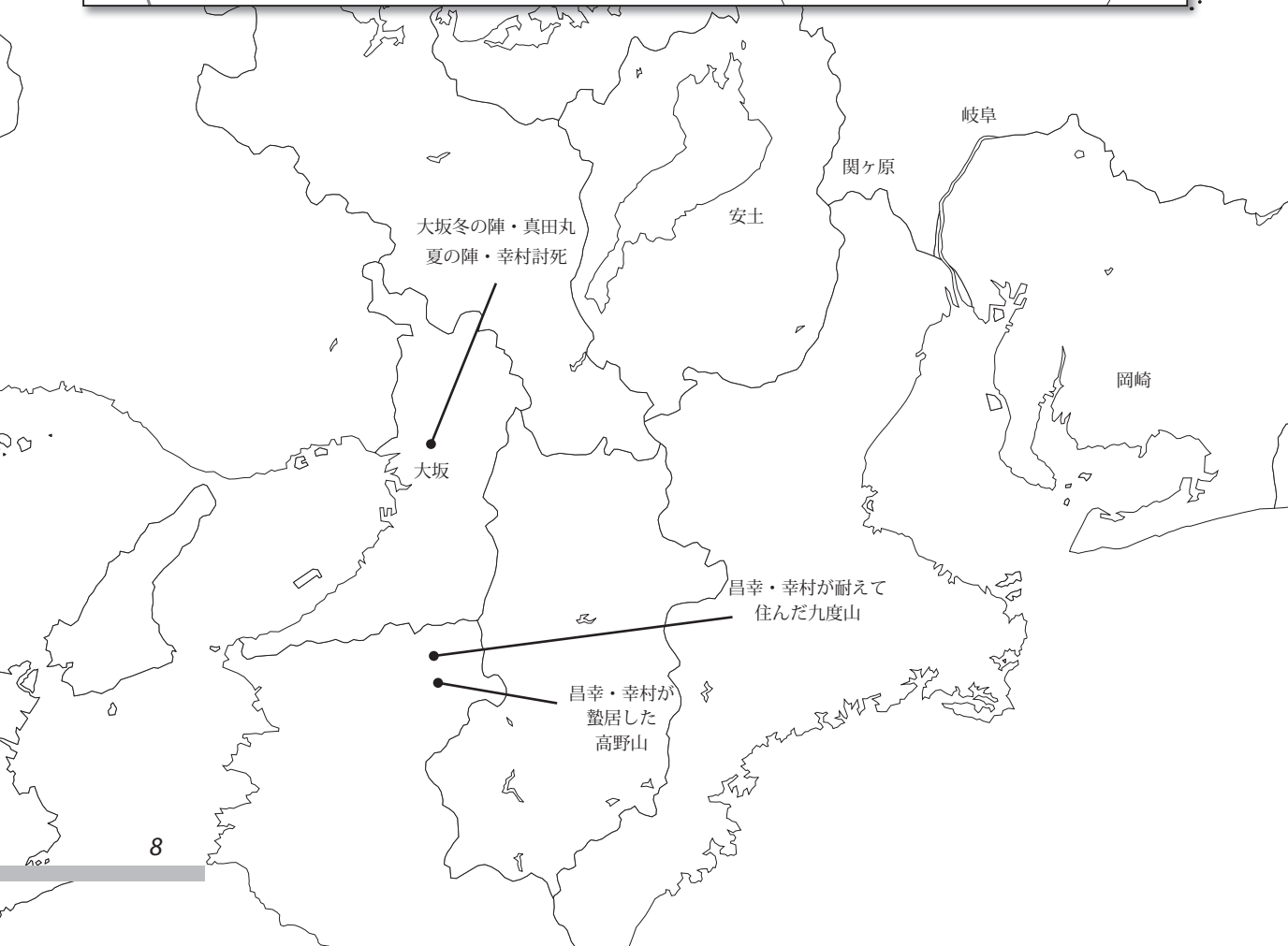
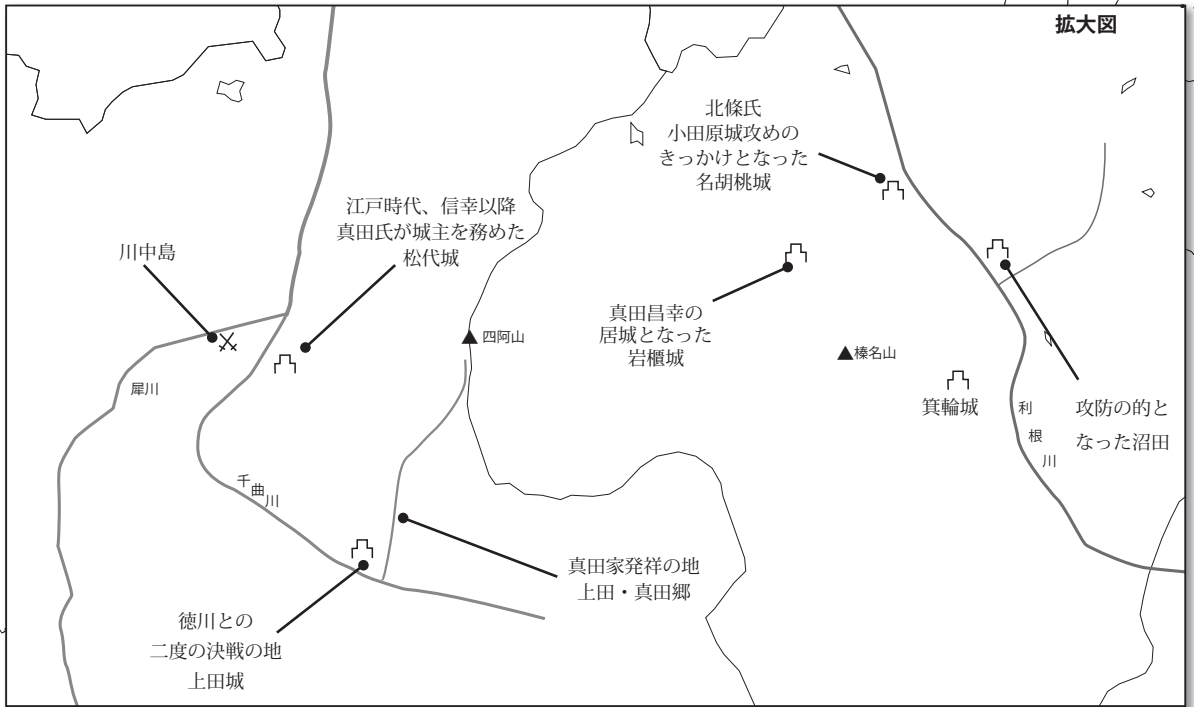
十 . 武田二十四将 先方衆のハンデを越えて .....	<b>30</b>
十一 . 昌幸の沼田城攻略 執念をもって臨む .....	<b>32</b>
十二 . 昌幸の沼田城死守 使えるものは何でも使う .....	<b>34</b>
十三 . 昌幸による新府城築城 築城のプロ意識 .....	<b>36</b>
十四 . 武田滅亡時の昌幸 あきらめずに策を考える .....	<b>38</b>
十五 . 武田滅亡から織田従属へ 小勢力ゆえのサバイバル .....	<b>40</b>
十六 . 滝川一益との関係 上司とのつきあい方 .....	<b>42</b>
十七 . 北条家の傘下へ 妥協もときには必要 .....	<b>44</b>
十八 . 家康のもとへ 変わり身の早さが身を守る .....	<b>46</b>
十九 . 沼田問題 意地を貫くことの必要性 .....	<b>48</b>
二十 . 上田城築城 利用できるものはとことん利用する .....	<b>50</b>
二十一 . 昌幸の城づくり 基本を学び応用する力 .....	<b>52</b>

## 第二章

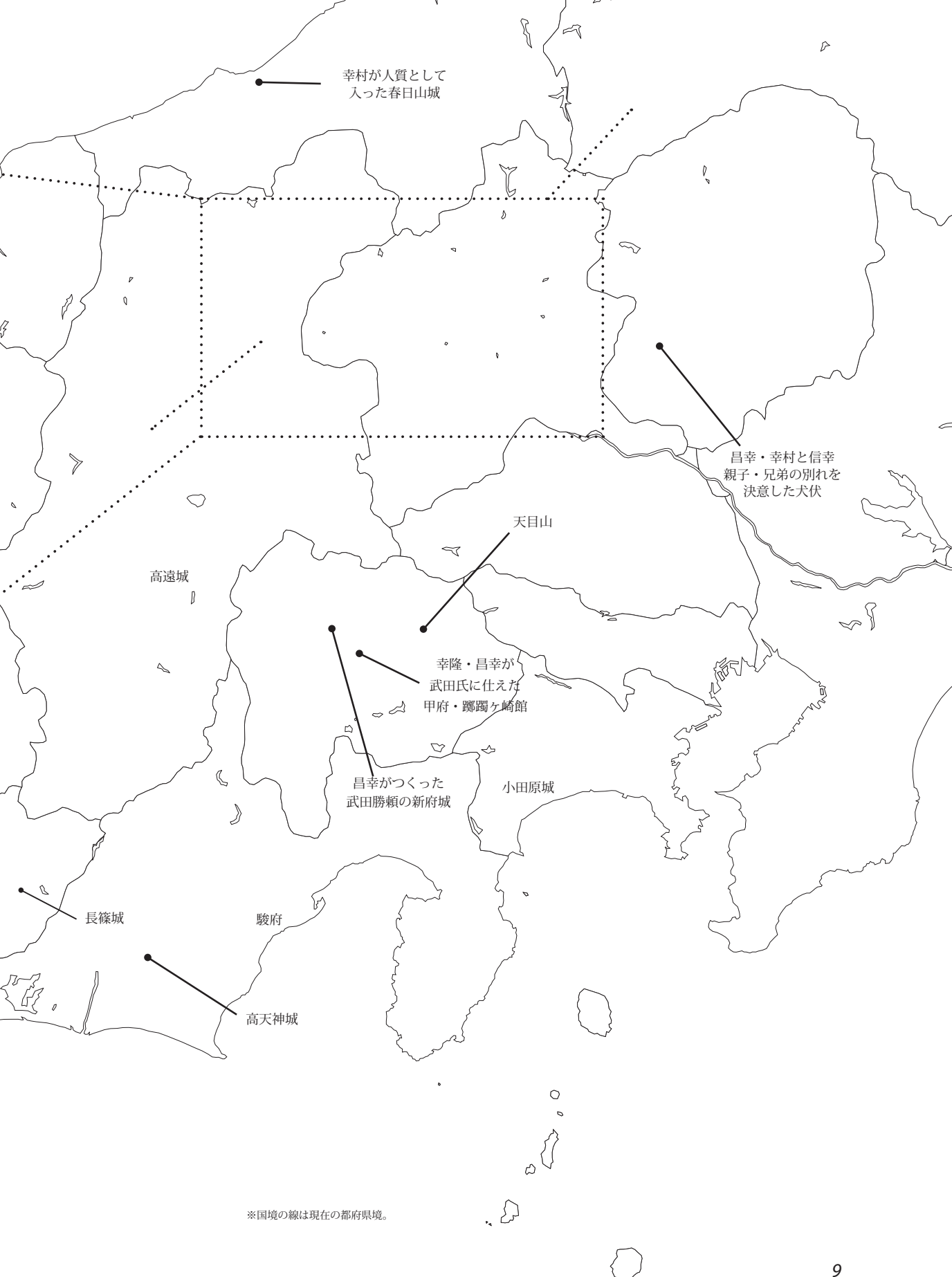
真田家、スキルの蓄積	55
一. 第一次上田合戦への道 自己を強くアピールする	56
二. 第一次上田合戦 相手をじらす余裕と度胸	58
三. 幸村は上杉家へ 他家の軍法を学ぶ	60
四. 直江兼続から幸村が学んだもの 義の心	62
五. 秀吉に仕える幸村 置かれた状況を活かす	64
六. 昌幸の能力と姿勢「表裏比興」といわれても耐える	66
七. 沼田城を北条へ 主張すべきは主張する	68
八. 真田家臣団の形成 部下を育成する力	70
九. 忍者の活用 存亡にかかわる情報収集活動	72
番外「真田十勇士」の実像 モデルはいたのか	74
真田三代が生きた時代（略年表）	76



# 真田三代の主な足跡







幸村が人質として  
入った春日山城

昌幸・幸村と信幸  
親子・兄弟の別れを  
決意した犬伏

天目山

幸隆・昌幸が  
武田氏に仕えた  
甲府・躑躅ヶ崎館

昌幸がつくった  
武田勝頼の新府城

小田原城

高遠城

長篠城

駿府

高天神城

※国境の線は現在の都府県境。



# 第一章

真田三代 逆境を生き抜く知恵と戦略

## 真田家の土台・基礎づくり

真田家が戦国時代に活躍する  
その素質はどのようなところにあったのでしょうか？  
彼らがどのような状況で  
力を蓄えていったのかをみていきましょう。

# 真田のルーツと その経済的基盤

## ◆滋野家

清和天皇を祖として信濃国に定住した一族とされる説、また大伴氏の流れともいわれる。古くから東信（信州東部）地方に住んだ一族。

## ◆大塔合戦

1400年（応永7）9月に守護の信濃支配に反発する北信・東信の武士がひき起こした合戦。信濃守護職の小笠原長秀の強圧的な領国支配に怒った村上氏、元々敵対していた大文字一揆などが中心となり、北信・東信の主だった武士が連合して挙兵した。

## ◆結城合戦

永享12（1440）年3月、結城氏朝が、下総結城に第4代の鎌倉公方であった足利持氏（將軍足利義教と対立したが破れ自刃）の遺子春王と安王を奉じて幕府軍に抗した。しかし、室町幕府方の上杉憲実、清方に攻められ結城城は落ち、氏朝は自殺。

## ◆『永享記』

永享の乱の後の関東の情勢を題材にした室町時代の戦記物語。作者、成立年代ともに不明だが、内容は正確である。

## ◆『滋野通記』

真田一族の歴史書。

## ◆『寛政重修諸家譜』

寛政年間（1789年 - 1801年）に江戸幕府が編纂した系譜集。

真田家の苗字の地は信濃国ちきがた小県郡真田（長野県上田市真田町真田）である。平安時代から、東信地方には滋野三家とよばれる滋野家の流れをくむ三家、すなわち、海野うん・禰津ねつ・望月の三家が栄えており、真田家はこの海野家からの分かれといわれている。

江戸時代に作成された真田家の系譜および系図では、海野棟綱の子、幸隆（幸綱とも）が真田荘に住み、土地の名を苗字にしたという。しかし、応永7年（1400）9月の大塔合戦のことを記した『大塔物語』という史料には、合戦に加わった禰津遠光の一派として「実田」の名がみえ、この「実田」は真田と同じとみられる。また、永享12年（1440）の結城合戦のとき、結城城に籠城し、その後、斬首された武士の名が『永享記』にみえるが、そこにも「真田」の名がみえるので、幸隆より前に、真田を名乗る武士がいたことはまちがいない。ただし、それと真田幸隆がどう結びつくのか、結びつかないのかは明らかではない。

実は、幸隆の父親の名前についても史料によって違っている。『滋野通記』および「真田家系図」では父親を海野棟綱とするが、徳川幕府が編纂した『寛政重修諸家譜』では、

棟綱——幸義——幸隆

としており、幸義の子ということになる。また、海野家の氏神白鳥神社の神主家に伝わった「海野系図」によると、棟綱の娘が嫁いだ先で生まれたのが幸隆だとしている。さらに、「海野正統家系図」では、幸隆は棟綱の娘の婿としており、このあたり系図によってまちまちであり、確定することはむずかしい。

ところで、系図類には「真田荘に居住したので真田を称した」と出てくるが、古文書や記録に真田荘という荘園名は出てこない。真田荘というのはなかった可能性が高く、真田郷というべきなのかもしれない。場所としては長谷寺沢の扇状地に位置し、周囲は1500メートルから2000メートル級の高い山々が連なり、標高750メートルほどの盆地となっていて、南東の方角が開け、上田の市街地につながっている。のち、幸隆の子昌幸のときに、城を上田に移したのも納得できる。

注目されるのは、真田の地が、現在の上田市と群馬県沼田市を結ぶ通称「上州街道」の道沿いに位置している点である。現在の国道144号線で、鳥居峠を越えて群馬県の嬭恋村<sup>つまごい</sup>、長野原町を通り、沼田市に通じている。また、菅平方面に抜けると、須坂市、長野市にも通じており、交通上の要衝だったことがわかる。

真田郷そのものの農業生産力は決して高い方ではなく、江戸時代の真田村の石高は1000石以下だったと推定される。では、真田は何を経済基盤としたのだろうか。

真田の上州街道沿いに「上町」「中町」「小路」「下小路」といった小字があり、そこが町となっていたことがわかる。真田家の城下町であり、また、近くに山家神社<sup>やまが</sup>・白山寺<sup>はくさんじ</sup>といった神社や寺もあり、修験者・僧侶さらに商人たちの往来があり、山間部でありながら、商品流通経済が盛んだった様子がうかがわれる。これは、信濃と上野を結ぶ上州街道があったからである。真田幸隆は、この経済基盤をがっちり握って飛躍していくことになる。基盤を固めることがいかに重要かを示しているといつてよい。

#### ◆白鳥神社

海野宿の産土神でもあり、海野氏、真田氏の氏神として祀られた。長野県東御市本海野、海野宿にある。

#### ◎海野棟綱（?～?）

滋野三家の嫡流である海野家の当主。

#### ◆上州街道

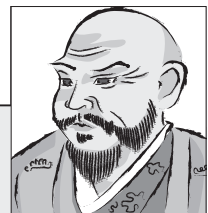
北国街道・上田から上信国境の鳥居峠に至る脇街道。鳥居峠から先、上野（群馬県）に入ると信州街道（長野街道）と名を変え、中山道高崎まで続く。

#### ◆山家神社

創立は不詳ながら、景行天皇の御代（71～131）に日本武尊を合祀したと伝わっている由緒ある神社。奥社は、四阿山山頂にある。白山寺は、山家神社の神宮寺であったが、明治の廃仏毀釈で廃寺となった。

#### 教訓

- 置かれている状況をしっかりと把握し、地の利を存分に活用し、基盤を固めることが重要である。



真田幸隆

一  
一真田の領地  
場所的利点を活かす

## ◆松尾古城

現・上田市の真田郷の北部。角間川と神川の交わるあたりにあった山城。

## ◆詰の城

複数の城で防衛地域を考えた場合の最終拠点となる城。支城に対する本城。

## ◆躑躅ヶ崎館

現・甲府市古府中町。武田氏の本拠地。信虎、晴信（信玄）、勝頼三代の60年余りにわたって府中として機能した。躑躅ヶ崎館の跡地には、武田信玄を祭神とする武田神社が建てられている。

## ◆永楽通宝

中国・明の第三代皇帝の永楽帝（1360～1424）の時代に鑄造された銅貨。室町時代に輸入された。

真田には真田家の居城と居館が何ヶ所かある。一つは松尾城とか松尾古城とよばれる早い段階で居城としていたところで、やがてその南西に別の城を築いている。それも松尾城の名でよばれたが、古い松尾城と区別して松尾新城、あるいは松尾本城などよばれ、真田山城とか真田本城などともいわれるケースもある。険しい山の山上に築かれており、どちらも詰<sup>つめ</sup>の城である。

それに対し、平地には居館が築かれ、一般的には、松尾本城から約2キロメートル南下したところにある本原の「御屋敷」が平時の居館といわれている。東側が約80メートル、西側が約130メートル、南側が約160メートル、北側が約150メートルの規模で台形をしており、土塁をめぐらされている。南側には大手とされる入口がある。

現在、そこが「真田氏館跡」として整備され、公園となっているが、若干疑問もある。地形に制約されているとはいえ、当時の真田家クラスの居館としては大きさが不自然だというのが一つ。もう一つ、発掘調査の際に、幸隆時代のものが遺物としてほとんど出土しなかったことである。この点については、幸隆が武田家の重臣だったので、自身は甲斐の躑躅ヶ崎館<sup>つづじがさき</sup>の周囲に屋敷をもっていたため、ふだんここに生活していなかったからではないかといわれることもあるが、疑問である。

むしろ、字「真田」と字「山家」に隣接する場所の館跡推定地とされる場所の方が幸隆時代の居館地であった可能性が高い。松尾本城の北東1キロメートルほどの所の、山を登ってすぐの場所である。館跡と推定される地内から永楽通宝など1800枚余が発見されたこともあり、

館跡と推定される南は岩井堂川が流れ、北側は堀跡と思われる低地もあり、山家神社および白山寺も近いので、こちらの方に館を構えていたものと思われる。

松尾本城から北東へ少し進むと鳥居峠で、そこが信濃と上野の国境であり、峠を越えればそこは吾妻郡である。国もちがい、郡もちがうので結びつきが弱いように思われるが、実は、そのあたりは古くから滋野一族が栄えており、鎌倉初期から中期にかけては海野氏の所領があったという。

そのため、上野国吾妻郡には、海野氏の流れをくむ鎌原氏・西窪氏・羽尾氏や、禰津氏の流れをくむ大戸氏・浦野氏、望月氏の流れをくむ湯本氏・横谷氏などがいた。このことが、真田幸隆にとっては有利な状況となっていたのである。現在の感覚だと、どうしても、国が異なり、しかも峠を越えるとなると、交流がほとんどないように思われるが、当時は、むしろそうした同族意識が強く、国境を越えての往来は盛んで、上州街道を扼する形の場所に城と居館を構えた真田家は、信州と上州を股にかけていた一族だったのである。

この点を見ごとに衝いたのが作家の火坂雅志氏である。同氏の編になる『実伝 真田幸村』の中で、松平定知氏と対談しているが、その中で興味深い発言をしている。「信州人の頑固な真面目さや知識欲、上州人の進取の気性、真田にはこの両方の気質が入っている。ハイブリッドなんですよ」。信州人と上州人の気質をあわせもった武将という表現は当たっているように思われる。

また、幸隆の場合、同族との結合強化にも力を入れており、押さえるべきところは押さえていたとの印象がある。

#### 教訓

- 自分の置かれているところの利点を活かし、仲間を得ることで、自分の力を増すことができる。

#### ◆吾妻郡

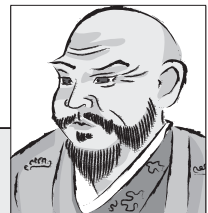
群馬県の北西部にある郡で、現在の中之条町、長野原町、嬭恋村、草津町、高山村、東吾妻町からなる。

※扼する

強くおさえる。要所を占めるの意味。

#### ◎火坂雅志

(1956～2015) 日本の小説家。主な作品に『覇商の門』『黒衣の宰相』『天地人』など。直江兼統を主人公とする『天地人』で中山義秀文学賞を受賞し、2009年NHK大河ドラマ原作となった。



真田幸隆